緩和ケアのちょっとタメになる話

Vol.16

第16回のテーマはこちら

「死の性質と子どもの理解」

～子どもと死の話をするときのために～

子どもと「死」についての話をするときに「どう話そうか」と悩むことがあると思います。
どうすれば子どもに伝わるのか。子どもに伝わりやすい表現は？
今回はそんな悩みを“死の性質”という視点からお話していきます。

死の主な性質は以下の4つになります。

不可逆性	死は一方通行である 死んだものが再び生き返るということはない
最終性	死によってすべてが終わる 死は生命の最終地点である
普遍性 （不可避性）	すべての生物が行きつく先は例外なく死である 死はどのような手段をもってしても避けられない
因果性	死には肉体的・生物学的な要因がある

これらの性質を理解しているかというのが子どもと死についての話をするときに重要となります。
おおよそ年齢ごとの理解度というものは当然あるのですが、基本的には子どもと対話する中で
理解度に応じた言葉を使うのが良いと思います。
特に入院経験があったり身近な人の死を経験した子どもは年齢以上に死への理解があることもあります。
なので子どもの年齢だけを見て難しいからと決めつけたり対話を避けたりしないように注意しましょう。

例えば
子どもが誰かの死に対して罪悪感を抱いている(自分が悪いことをしたから死んじゃった等)
　→「因果性」の理解ができていないため、子どもが理解できる別の表現を探す。
子どもが死を怖いものだと認識して忌むべきものだと思っている
　→死の「不可逆性」や「最終性」を理解しているからこそそう思っている。
　　さらに「普遍性」が理解できれば死への恐怖感は少しましになるかもしれない。

などなど子どもが抱く“死のイメージ”を性質に置き換えて考えると
死に関する対話の手助けになるかなと思いますのでぜひ参考にしてください。

腹黒ナースマン